

DO 挿入と V 移動に影響を与える要因について

中野 雅也

1 研究の目的

本研究の目的は、極小主義の立場では説明することができない、初期近代英語 (EModE) における DO 挿入および V 移動を分類していると考えられる何らかの特性を探ることである。極小主義では DO 挿入と V 移動には T の強弱が関与していることが示されている (Radford, 2004, p.131-134) が、その分類については言及されていない。一方 Varga (2005) および Curry (1992) などの通時的研究によると、V 移動を起こす動詞は特定の種類に限定されるようである。Varga (2005) は 18~19 世紀の文学作品を調査した結果、know, say, doubt, think, mistake のような心の動き (action of the mind) を表す動詞が V 移動を起こしたとしている (p.264)。一方、Curry (1992) は、Jane Austen の 2 作品 *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others* と *Mansfield Park* を調査した結果、dare(s), have/ had, know/knew, cared が V 移動で使用されていた (p.713)。

また、Quirk et al. (1985) によると、イギリス英語では現代英語 (PE) においても、語彙動詞 have は(a)所有 (possession), (b)関係 (relationship), (c)健康 (health) のような静的な (stative) 意味を持つときは V 移動が可能であるとしている (p.131-132)。

このことから、DO 挿入と V 移動の選択には、動詞の意味が関与していることが考えられる。本研究では EModE の代表的作家である Shakespeare の 2 作品を取り上げ、作品中の DO 挿入と V 移動が、動詞の意味によって分類されているのかどうかを検証する。

2 研究の方法

データを収集するために Shakespeare の *Romeo and Juliet* および *Macbeth* を使用した。疑問文・否定文・否定疑問文に加え、EModE だけに見られる、非強調の平叙文での DO を加えた 4 種類の文を上記 2 作品から集め、意味による分類を試みた。動詞の意味の分析は『ロミオとジュリエット』(中野好夫訳, 1951) および『マクベス』(福田恒存訳, 1969) における日本語訳と照らし合わせて行った。

3 先行研究のまとめ

3.1 Varga (2005)

Varga (2005, p.264-266) は 18 世紀から 19 世紀における文学作品の V 移動について調査を行い、どの動詞が V 移動を起こしたかを示している。それによると 19 世紀後半に至るまで、特定の動詞が V 移動を行っていたことが分かった。*Robinson Crusoe* (1719) の調査では 30 例の V 移動が検出されたが、そのうち 26 例が know であり、残りは see, care, forget

であった。また、その1世紀後の作品である *Frankenstein* (1816) での調査では、close, doubt, know, think, seek が V 移動を行っていた。それ以降の作品では know が最も多く、他にも doubt, care, mistake, tell, hesitate が使用されていた。さらに *Pride and Prejudice* (1813) では say, think, come, admit, care, doubt, hear, hesitate, know, lose, make, say, think, venture が V 移動として検出された。また、語彙動詞 have を使用した疑問文は6例検出され、そのすべてが V 移動であった。Varga (2005) はこれらの V 移動を起こす動詞は心の動き (action of the mind) を表す動詞であるとしている (p.264)。

3.2 Curry (1992)

Curry (1992) は、Jane Austen の2作品 *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others* と *Mansfield Park* を調査した結果、dare(s), have/ had, know/knew, cared が V 移動で使用されていたことを示している (p.713)。

3.3 Quirk et al. (1985)

Quirk et al. (1985) によると、語彙動詞 have は他の語彙動詞とは性質が異なり、イギリス英語では PE においても V 移動が可能である。しかし、have が持つすべての語彙的な意味において V 移動が可能となるわけではなく、繰り上げの対象となるのは(a)所有 (possession), (b)関係 (relationship), (c)健康 (health) のような静的な (stative) 意味を持つときである。これらの用法はイギリス英語において more formal であるとされる (p.131-132)。

- (1) a. We *haven't* any butter.
- b. *Have* you any brothers?
- c. I *haven't* a headache any longer.

しかし、receive/ take/ experience/ cause などの動的な (dynamic) 意味で用いられるときは繰り上げを許さず、DO 挿入が義務的となる (p.132)。

- (2) a. Does she have cake with her tea?
- b. Did you have any trouble finding a new apartment?
- c. Did you have a good time in Paris?
- d. Did they have the car repaired?
- e. Did they have you do the washing up?

これらは明らかに、語彙動詞 have の T/C への V 移動の可否が動的・静的意味かどうかによって決定されていることを示すものである。Varga (2005, p.264) は調査結果で示された動詞を心の動き (action of the mind) を表す動詞であると述べているが、動詞の最も大きな意味区分は動的・静的意味によるものであるため、これらは静的な意味を表す動詞であると言える。

よってより一般化して考えた場合、Varga (2005)、Curry (1992) および Quirk et al. (1985) による研究結果を統合的に考えると、動詞は静的な意味を持つ場合は V 移動を起こし、動的な意味を持つ場合は DO が挿入されると仮定できる。

4.1 DO 挿入の結果

まず両作品における疑問文、否定文、否定疑問文を調査し、DO 挿入と V 移動で使用される動詞を動的・静的意味によって分類した。以下の表 1 および表 2 は、*Romeo and Juliet* および *Macbeth* それぞれにおける静的・動的動詞の一覧である。

表 1 *Romeo and Juliet* で DO 挿入される動的・静的動詞一覧 (疑問文・否定文・否定疑問文)

意味	動詞一覧
静的	deny (隠す), hear (聞こえる), keep (住まう), know (知っている), like (好む), lodge (宿る), taste (味がする), think (考える), use (否定文で「(性分として冗談を) 言わない」)
動的	answer (返事をする), attend (注意して聞く), begin (始める), bite (噛む), bring (持ってくる), dream (夢を見る), excel (勝る), fall out (喧嘩する), feel (直接感じる), give (与える、見させる、感謝を与える), interrupt (邪魔する), kill (殺す), laugh (笑う), love (愛する), make (使役), mark (注意を払う), move (動く), note (音符に書く / 分かる), quarrel (喧嘩する), say (言う), see (look at と同義), shed (血を流す), stay (とどまる), swear (誓う), work (効力がある), wring (絞る)

表 2 *Macbeth* で DO 挿入される動的・静的動詞一覧 (疑問文・否定文・否定疑問文)

意味	動詞一覧
静的	dare (勝手に～する), fear (恐れる), find (分かる), hear (聞こえる), keep (～のまま), know (知っている), mean (意味する)
動的	adhere (足並みが揃う), bid (命じる), bring (持ってくる), dress (着せる), give (もてなす), hold (黙る), hope (希望する), look (見る), make (～な表情を作る), mark (注意を払う), muse (気にする), provoke (そそのかす), put up (示す), say (言う), send (使いを出す), show (見せる), speak (話す), start (驚く), strike (火を消す), tear (切り裂く), yield (屈する)

Romeo and Juliet において DO 挿入される動詞を調査した結果、静的意味で使用されている動詞は deny, hear, keep, know などであり、心理状態や知覚、現在の状態を表す動詞である。一方、動的意味で使用されている動詞は answer, attend, begin, bite など、主語の意思による自制が可能な動作を表すものである。また、*Macbeth* では、V 移動される動詞として典型的な例の一つである dare が DO 挿入されているものの、adhere, bid, bring, dress などの自制可能な動詞が用いられている。全体的には、動的な意味の動詞と比較すると、静的な意味で使用される動詞は少ないように見える。

以下に示す例のうち、(3)の keep は「住まう」という静的な意味であり、(4)の note は「音符に書く」という動的な意味でも用いられている。また、(5)は主語による意図を表す、動的に用いられている hold の例である。

- (3) Did ever dragon keep so fair a cave? (Juliet, *Romeo and Juliet*, III. ii)
 「それにしても、あの恐ろしい竜が、こんな美しい洞窟に住んだ例があるかしら？」
 (『ロミオとジュリエット』 p.138)

- (4) I will carry no crotchets, I'll re you, I'll fa you, do you note me?
 (Peter, *Romeo and Juliet*, IV. v)
 「俺は (1 気まぐれ 2 音符) は真平、我慢はできぬ。貴様をレ (re) にし、ファ (fa) にしてくれる。どうだ。(1 わかるか? 2 音符に書くか?)」

(5) Why do we hold our tongues, that most may claim this argument for ours?

(Malcolm, *Macbeth*, II. iii)

「なぜ黙っている、おたがい、誰よりも一番言い分があるはずでは？」

(『マクベス』 p.52)

DO 挿入におけるこれらの動詞の検出数を表にすると、以下のようになる。

表3 DO 挿入における動詞の意味・静的意味の割合 (疑問文・否定文・否定疑問文)

作品名	静的意味	動詞の意味	計
<i>Romeo and Juliet</i>	10 (23.8%)	32 (76.2%)	42
<i>Macbeth</i>	7 (22.6%)	24 (77.4%)	31

両作品において DO 挿入される動詞のうち静的意味の動詞と動詞の意味の動詞の割合はほぼ同じであり、静的動詞の数が少なく、動詞の意味の動詞の数が多いことが確認できる。その割合はおよそ 3 : 7 であり、動詞の意味の動詞が大きな割合を占めているとすることができる。表1から表3に示された結果は、DO 挿入は動詞の意味の動詞の方が使用されやすいという仮定に対する証拠の1つとして考えることができる。

4.2 V 移動の結果

一方、V 移動を起こす動詞に関しても、V 移動は静的動詞が用いられやすいという仮定を支持する現象がみられた。以下の表3および表4は、両作品における V 移動型の動詞の静的・動詞の意味の一覧を示している。

表4 *Romeo and Juliet* で V 移動する動詞・静的動詞一覧 (疑問文・否定文・否定疑問文)

意味	動詞一覧
静的	believe (信じる), call for (求める), crave (懇願する), *do (= how is Subj?), doubt (疑う), dream (思う), expect (期待する), look for (期待する), fear (恐れる), find (分かる), have (持っている), hear (聞こえる), hold (思う), know (知っている), like (好む), live (生きる), look (～のように見える), mean (本気である), need (必要とする), prevail (うまくいく), *say (～の意見はどんなものか), see (分かる), spare (気にする), stand (～の状態である), stay (黙っている), storm (いきり立つ), thank (感謝する), think (考える), weep (悲しんでいる)
動詞	bite (噛む), cast (捨てる), chide (叱る), come (来る), depart (出発する), go (行く), help (手伝う), hold (押さえる), let (～させる), mark (注意を払う), move (動く), prepare (準備する), put (置く), rail (呪う), reply (口答えをする), run (逃げる), say (言う), see (会う), speak (話す), stay (グズグズする), stir (起きる), swear (誓う), talk (話す), tell (言う), tempt (怒らせる), turn (向く), wash (洗う), weep (泣く)

表5 *Macbeth* で V 移動する動的・静的動詞一覧 (疑問文・否定文・否定疑問文)

意味	動詞一覧
静的	care (構わない), cleave (身につく), concern (関する), consider (考える), dare (あえて~する), dismay (怯む), *do (= how is Subj?), fail (必ず~する), fear (恐れる), *go (状況・時が経過する), have (持つ), hear (聞こえる), know (知っている), look (~に見える), mean (意味する), need (必要である), please (~の意にかなう), regard (見なす), *say (~の意見はどんなものか), see (見える), stand (~の状態である), think (考える)
動的	attend (pleasure を伴って「待たせる」), beg (一時的に願う), blunt (弱らせる), come (来る、手に入れる), do (行う), get (拾う), go (行く), have (掴む), hear (listen to と同義), keep (隠す), know (分かる), let (~させる), love (愛する), put (なすりつける), ride (馬で出かける), send (使いを出す), speak (話す), wake (目を覚ます)

表4および表5の静的意味の動詞の一部にアスタリスクを付したものがあるが、それらは本来動的な意味を持っているが、本文中では静的な意味で用いられているものである。特に say に関しては、両作品を通じて *what (how) say Subj...?* で「…の意見はどんなものか」という意味を表す固定表現で使用されている頻度が高く、14 例中 11 例 (78.5%) がこの用法であった。また、語彙動詞 have に関しては、両作品において DO 挿入されることはなく、すべて V 移動を起こしている (全 10 例中 10 例)。以下では say の例を示す。

(6) But now my Lord, what say you to my suit? (Paris, *Romeo and Juliet*, I. ii)
 「だが、それはともかくとして、私のお願いはいかがでしょう。」
 (『ロミオとジュリエット』 p.30)

(7) How say'st thou that Macduff denies his person at our great bidding?
 (Macbeth, *Macbeth*, III. iv)
 「どう思う、マクダフは断わったな、来いと言ったのに？」 (『マクベス』 p.78)

V 移動におけるこれらの動詞の検出数を表にすると、以下の表6が得られる。

表6 V 移動における動的意味・静的意味の割合 (疑問文・否定文・否定疑問文)

作品名	静的意味	動的意味	計
Romeo and Juliet	64 (57.7%)	47 (42.3%)	111
Macbeth	45 (62.5%)	27 (37.5%)	72

DO 挿入における結果 (表3) では、静的動詞と動的動詞の割合はおおよそ 3 : 7 であったのに対し、表6では V 移動における静的動詞と動的動詞の割合はおおよそ 6 : 4 となっている。これらは V 移動において静的動詞の方が用いられやすく、動的動詞は用いられにくいことを表している点で一致している。

よって、表3および表6での結果から、動詞が動的な意味を持つ場合は DO が挿入され、静的な意味を持つ場合は V 移動を起こすという本研究における仮定は支持されていると考えられる。

4.3 平叙文 DO の結果

動的動詞が DO 挿入を好むという仮定を支持するさらなる現象として、平叙文での DO 挿入の結果を挙げるができる。疑問文・否定文・否定疑問文の結果は表3および表6から明らかであるが、平叙文での DO 挿入に関しても同様に分類した結果、さらに顕著な数値を得た。以下の表7と8で、Shakespeare 2 作品における静的意味で使用された動詞と動的意味で使用された動詞を挙げ、それらの使用頻度の割合を表9で示す。

表7 *Romeo and Juliet* における平叙文 DO での静的・動的動詞の一覧

意味	動詞一覧
静的	behold (知っている), consort (仲良くする), give (sorrow を伴って「悲しむ」の意), grieve (悲しませる), hang on (残る), know (知っている), lie (横たわる), live (生きる), lour (怒っている), make (words を伴い「真実を語る」の意), possess (所有する), reign (居る), remember (覚えている)
動的	approach (近づく), apprehend (捕まえる), bear (運ぶ), beseech (懇願する), bite (噛む), burn (燃える), buy (買う), call (呼ぶ), cease (存在するのをやめる、すなわち「消える」), cote (視線が通り過ぎる、すなわち「注目する」), couch (伸ばす), defy (否定する), do (使役), dream (物事を真実にする、の意で使役に近い), drizzle (露を降らす), ebb (潮が引く), enrich (手を取る), excuse (言い訳をする), exile (追放する), give (与える), import (引き起こす), intreat (懇願する), know (知る、わかる), lace (縁どる), leave (任せる), lie (横たわる、(血が) 流れる), love (愛する), make (言い訳をする), meet (交わる), menace (脅す), need (必要となる), owe (償う), prompt (促す), protest (誓う、抗議する), read (読む), reign (占領する), request (要求する), return (戻る), scare (驚かせる), scorn (嫌う、軽蔑する), see (会う、見つける), send (使いにやる), sink (沈む), sit (しみつく), slay (殺す), sleep (眠る), spit (刺す), spy (手に入れる), stay (ぐずつく), taste (舐める), teach (教える), touch (手を合わせる), wear (着る)

表8 *Macbeth* における平叙文 DO での静的・動的動詞の一覧

意味	動詞一覧
静的	fear (恐れている), hear (聞こえる), seem (～のようだ), sound (～に聞こえる)
動的	appoint (約束して決める), approach (近づく), approve (証拠を示す), bear (贅辞をもつ、つまり述べる), bleed (血を流す), breed (生む), call (呼ぶ), cling (絡みつく), come (来る), command (言いつける), commend (ゆだねる), contend (葛藤する、もみあう), entomb (埋める), fear (心配する、怖がる), fight (戦う), find (見つける), fly (逃げだす), forget (忘れる), glare (ぎらぎら光る), go (行く), grieve (悲しむ), guide (制御する), kill (殺す), lack (～を待つ), laugh (笑う), leave (出発する、別れる), lie (寝る), line ((支援を) 確保する), make (恐れを抱く、助力を求める、～にする), mock (ものまねしてからかう), murder (殺す), oppose (逆らう), receive (与えられる), repent (公開する), report (報告する), rouse (うごめく), say (言う), sear (焼く), shake (震える), slope (傾ける), speak (話す), stand (見張りに立つ), swarm (悪い点が集まる), think (思う), unbend (突き崩す), unfix (身の毛がよだつ), unmake (しり込みさせる)

表9 平叙文 DO の動的意味・静的意味の割合

作品名	静的意味	動的意味	計
<i>Romeo and Juliet</i>	15 (19.7%)	61 (80.3%)	76
<i>Macbeth</i>	4 (6.8%)	55 (93.2%)	59

両作品において、平叙文 DO では、動的意味で使用される動詞の割合が非常に高く、8割から9割を占めている。平叙文の DO におけるこの結果は、疑問文・否定文・否定疑問文における調査結果よりもさらに顕著な傾向を示していると言える。よってこの結果から考えても、動詞が動的意味で用いられる場合は DO が挿入されると仮定することは妥当であると考えられる。

一方、中尾 (1972) によると、平叙文での DO は、非強調もしくは使役用法を持っていたとされる (p.285) が、強調用法・非強調用法の区別は、語順倒置が起こらない限りその判別が困難であるため、本調査ではその区別は行っていない。しかし、平叙文 DO 全体において、動的動詞が用いられる割合が8~9割という極めて高い頻度であることを考慮すると、強調・非強調の区別なく、DO と共起する動詞は動的意味で用いられやすいことを表していると考えられる。

以上により、DO 挿入および V 移動における動詞の意味に関する調査の結果は、DO 挿入と V 移動に関して、動詞の意味がその選択に関与している点を示していると考えられる。それゆえ Varga (2005), Curry (1992) および Quirk et al. (1985) らの先行研究の結果か

ら導かれた、本研究における仮定は妥当であると言える。

4.4 考察

以上のように、本研究では疑問文・否定文・否定疑問文・平叙文における V 移動と DO 挿入での動詞の動的・静的意味に着目して調査を行い、その結果 V 移動では静的意味の動詞が用いられやすく、DO 挿入では動詞の意味の動詞が用いられやすいことが示された。

その理由としては、迂言的 (periphrastic) DO の発達が関与している可能性が考えられる。中英語 (ME) 期に挿入されるようになった迂言的 DO は、本動詞の前に位置し、非強調の意味もしくは使役の意味を持つ構文であった。使役の迂言的 DO は東部地方で一般的となったが、1500 年直後に消失したとされている (中尾, 1972, p.285)。

- (8) a. Askaneus *dide* make a cite (使役)
= Askaneus caused people to make a city (中尾, 1972, p.285)

よって使役の意味を持っていた、初期の迂言的 DO は動的であったと考えることができる。そのため、動作動詞にとっては、迂言的 DO が持つ動性に反応し、迂言的 DO との共起が可能になったと仮定することは自然であるように思われる。表 9 が示す割合は、それを十分に裏付けるものであると考えられる。

また、なぜ静的意味の動詞が V 移動を起こしやすいかについて考えると、動詞が静的な意味を持つ場合、その動詞は動性を担う迂言的 DO との共起を拒み、その結果 V 移動を起こすようになったと考えることは妥当であると思われる。

歴史的には、(動的な) 使役としての迂言的 DO は疑問文、否定文、否定疑問文での DO 挿入が確立する頃には消失していたことから、動作動詞は迂言的 DO の使役用法が現存していたところに共起し始めたと考えられる。そして、平叙文での使役の DO が衰退した後には、動作動詞は平叙文以外での DO 挿入を行うことも可能となり、一部の静的動詞を除いては、大半の動詞が DO 挿入を受け入れるようになった、と考えられる。よって、be 動詞と静的な have が PE においても V 移動するのは、それらの動詞が持つ静的な意味と DO が持つ動的な意味が反発した結果であると言える。

本研究でのこの仮定に基づくと、have got 構文における動性・静性の相違を説明することも可能である。この構文はイギリス英語・アメリカ英語ともに用いられている表現であるが、使用される状況は異なる。Quirk et al. (1985) によるとイギリス英語では have got は語彙動詞 have と同様に所有、関係、健康を表す静的な表現であるが、繰り上げの have が formal であるのに対し、have got は informal である (p.131-132)。

- (9) a. We *haven't got* any butter.
b. *Have you got* any brothers?
c. I *haven't got* a headache any longer. (Quirk et al. 1985, p.131)

さらに Quirk et al. は、DO 型は動的であるため習慣的意味を表すことも可能であるが、have/ has got は静的であるため習慣的意味を表すことはない指摘している (p.132)。

- (10) a. *Have you got* a bad headache? (nonhabitual: 'now, at this moment')
b. *Do you have* bad headaches? (usually habitual : 'as a rule')
(Quirk et al. 1985, p.132)

一方 Biber, Conrad and Leech (2002) は、アメリカ英語の口語では所有を表す際は have

got よりも語彙動詞 have を用いるほうが一般的であるとしている。さらに、アメリカ英語では have got と have gotten には意味上の違いがあり、前者は所有を表すのに対し後者は何かを得ることや、状態の変化を表す（すなわち、get の意味を表す）としている（p.160）。一方、イギリス英語では have gotten はほとんど決して起こらない（‘almost never occurs’）としている（p.118）。

(ii) And we still *haven't gotten* knobs on the doors.

(American English conversation, Biber et al., 2002, p.160)

つまり、イギリス英語では have got 構文は静的な意味を有し、アメリカ英語では got/getten の相違によって静的・動的意味が変化することになる。

歴史的には、have got 構文は本来 get の完了形としての意味を表していたが、16 世紀後半に完了形としての意味が弱まり、本動詞 have の同意表現としても用いられるようになった（荒木・宇賀治, 1984, p.435-436）。荒木・宇賀治（1984）は語彙動詞としての get の意味が弱まったことに対して、「have が助動詞として頻用されるようになって、本来の所有の意味が薄れたと感じられ、補強表現に have got が転用された」という可能性を示している（p.436）。これはすなわち have got 構文の構造において、V である got の意味よりも T に位置する相助動詞 have の語彙動詞としての意味を表示することが優先された結果、V から T に語彙動詞の意味が転用されたと考えることができる。T に語彙動詞 have を置くことができるイギリス英語にとって、T にある相助動詞 have を語彙動詞として解釈することは比較的受け入れやすいと考えることができる。

一方、have の動的な意味（receive/ take/ experience/ cause など）を表す場合は DO 挿入が義務的となり、have は V 位置に留まらなければならない。また、have got 構文において get の完了形の意味（すなわち動的な意味）を表示する場合も、V にある gotten の意味が優先される。すなわち、動的な意味を表す場合、V によって意味が表示されることになる。

よって、これらをまとめると、静的な意味を表す場合は、V が持つ意味が T に転用されている点は、静的な意味での have が V 移動することと同じであると考えることができる。また、動的な意味を表す場合、動的な have および have got における got の完了形としての意味は、V によって表示される。これは、DO 挿入を起こす動詞が V にとどまるという事実と一致する。

このように、DO 挿入と V 移動には動詞の動的・静的意味が関与しているという本研究での仮定は、have got 構文の意味の相違を説明することができる。

5 まとめ

本研究によって、DO 挿入する動詞は動的な動詞が多く、V 移動する動詞は静的な動詞が多いことが分かった。このことから、DO 挿入には歴史的に迂言的 DO が持っていた使役的（すなわち動的な）意味によって動的な動詞が反応し、DO 挿入を受け入れたという可能性を示した。そして V 移動に関しては、静的な動詞が多く使用されたのは、迂言的な（動的な）DO と反発し、それゆえ DO を受け入れなかったためであるという可能性に言及した。さらに have got 構文における動性・静性に関しては、静的な意味の場合は語彙動詞の意味が T に転用されるために V から T への移動と同等であるとみなされ、動的な意味の場合は元位置の V の意味が優先される点は他の語彙動詞と共通している点を示した。

しかしながら、いくつか問題点も発見された。まず、V 移動型の否定と DO 挿入型の否定が混在している例があることである。

- (12) Speak not, reply not, do not answer me. (Capulet, *Romeo and Juliet*, III. v)
「黙っておれ、口答えは無用、返事はいらぬ。」 (『ロミオとジュリエット』 p.171)

これはパリスとの結婚に同意しないジュリエットに対し、怒ったキャピュレットが発した言葉である。3つの否定のうち、answerにのみDOが挿入されており、speakとreplyはV移動されている。3つとも自制可能な動詞であり、動的な意味で用いられている。1つの文中にこのような混在が見られる点は、本研究での仮定では説明することができない。

この例に限らず、表3と表6にはDOが挿入される静的意味の動詞や、V移動を起こす動詞の意味の動詞が検出されている。動詞の中でも、特にgoやcomeは両作品においてV移動する動詞として頻出しており、これらの動詞は意味によってDO挿入かV移動かが選択されていると考えることは困難である。

よって、DO挿入とV移動の選択に関して、意味によるアプローチの妥当性は高いと考えられる一方で、音韻などその他の側面も同時に関与していると考えられる。例えば音韻的要素を挙げてみると、comeおよびgoはともに単音節動詞であり、Shakespeare作品での1行10音節という韻律を保つ点では有利であると考えられる。また、(12)の場合、最後の動詞だけにDOを挿入することで、話し手の心的態度の差を表しているとも考えることができる。

そのため、DO挿入とV移動の選択に関する仮定は、さまざまな側面が複合的に関与している可能性も考えられる。

また、これらの仮説はあくまでもShakespeareの2作品における傾向であることから、EModE全般での傾向ではなく、Shakespeare自身の傾向である可能性が否定できない。本研究から得られる仮定だけでは、EModE期もしくはME期の他の作家にもあてはまるのか、という客観性に欠けている点は否めない。

また、本研究での仮定は、使役用法としての迂言的DOに関するME期のデータを分析した上での仮定ではない。そのため、迂言的DOが動性を有していたという仮定に関しても、さらに調査を重ねる必要がある。

よって今後の課題としては、コーパスを用いてより大きな量のデータを分析する必要がある。それによってEModE全般の傾向を把握し、今回の研究で得られた仮説が正しいかどうかを検証することで、PEでの語彙動詞haveとbeの問題に対する可能性をさらに追及することができる。

参考文献

洋書

- Biber, D., Conrad, S., & Leech, G. (2002). *Longman student grammar of spoken and written English*. Essex: Pearson Education Limited.
- Curry, M. J. (1992). The do variant field in questions and negatives: Jane Austen's *Complete Letters and Mansfield Park*. In M. Rissanen, O. Ihalainen, T. Nevalainen & I. Taavitsainen (Eds.), *History of Englishes: New methods and interpretations in historical linguistics* (pp.705-719). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Perez, J. R. V. (1997). The use of periphrastic do in early modern English negative declaratives: Evidence from the Helsinki Corpus: *Sederi 8*, 35-43
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London and New York: Longman.
- Radford, A. (2004). *English syntax: An introduction*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Shakespeare, W. (1937). *Romeo and Juliet*. London : Penguin Books
- Shakespeare, W. (1934). *Macbeth*. London : Penguin Books

Varga, E. (2005). Lexical V-to-I raising in late modern English : *Generative grammar in Geneva*, 4, 261-281

和書

荒木一雄・宇賀治正朋 (1984) 『英語史Ⅲ A』 大修館

シェイクスピア, W. (Shakespeare, W.) (中野好夫訳) (1951) 『ロミオとジュリエット』
新潮社

シェイクスピア, W. (Shakespeare, W.) (福田恒存訳) (1969) 『マクベス』 新潮社

中尾俊夫 (1972) 『英語史Ⅱ』 大修館

(本稿は、平成 23 年 2 月 11 日 (金) に行われた『同志社ことばの会』における研究発表を基
にしている)